

E-3 青年の生活空間としての個室について(第3報) — イメージの因子分析 —
山梨大学家政 浅見雅子

目的 児童と成人との間の時期にあって、独特の生活空間の構造を持ち、心身ともに発達過程にある青年の、個室に対して、どんなイメージを保持しているのか、その意識を分析し、把握することを目的としたものである。

方法 調査方法は、山梨県甲府市内の中学、高校、大学の学生562人(内訳は中学、高校、男女100人ずつ、大学男子49人、女子77人)を対象として、質問紙調査法でSD法を用いて昭和48年11月～12月にかけて行ったものである。

結果 「自分の部屋」を思ったとき、どんな感じ(イメージ)を保持しているか、という尋問に対し、25項目の表現により、7段階評定で求めた。因子分析は男女別に行い、セントロイド法により、バリマックス回転した。男子は、第1因子 肯定的(誇らしい、調和のとれた、満足した) 第2因子 否定的(年寄りじみた、夢のない、灰色) 第3因子 ौर人とした空間(空虚な、ひとりぼっちでまみしい、ひろびろとした) 第4因子 いらだたせる空間(よそよそしい、斗いの場、対立的) 第5因子 遊びとしての空間(快樂的、ドライな、男性的)の因子を抽出された。女子は、第1因子 肯定的(おてきな、飾りけのある、調和のとれた) 第2因子 否定的(空虚な、暗い、灰色) 第3因子 遊びとしての空間(行動的な、ドライな、快樂的) 第4因子 教養のための空間(静かな、勤勉な、おてきな) 第5因子 心豊かな空間(協調的、ひろびろとした、誇らしい)の因子が抽出された。男子は、よそよそしい、斗いの場として、神経にまわるような感じを保持しており、女子は、なじみ深い、協調的な感じを受容されている特色がみられた。